『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

仏教音楽について

―生命（いのち）の流れとひびき―

渡邊顕信

I　はじめに

ただいまご紹介いただきました大谷大学の渡邊でございます。私はこの宗教講座で仏教音楽ということを申しあげるようになりまして数回になります。ですから、なかには、また同じ話ではないかなと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、その点はどうぞご容赦いただきたいと思います。

実は、こちらの宗教講座というものを知りまして、私は非常に感動いたしました。二十数年

前から、現代は、あるいはこれからは心の時代であるということがいわれだしました。十八・九世紀の産業革命以来、人間の飽くない願いとして科学技術が非常に発達してまいりました。その発達したなかで、人間の一つの欲望でもある物質的なものを求めて、技術を高めようとする。そういうことが十九、二十世紀のひとつの生き方でありました。その結果、まさしく現代のような繁栄された時代を迎えているわけです。

ところが、それに対して若干疑問をもたれる人々もありました。つまり、物質文明や科学技術の他に、精神文化・心の問題があるのではないかと。この二十数年来、そうしたことが話題になってきたのです。皆さん方は明らかに二十一世紀を担う大事な方々であります。皆さんのなかのほとんどの方がお子さんを育てられるでしょう。二十一世紀の子どもたちを育てるということは非常に大きな意味がございます。この光華女子学園では学校の教育姿勢の基本に精神文化ということをおかれている。このことは非常に大切なことだとかねがね感じておりました。この宗教講座もそのような願いを込められて、設けられたとお聞きいたしました。

このような大学はそう多くはありません。ちなみに、『真実心』の「はじめに」に、阿部学長先生の光華女子学園の教育理念が示されています。「本学に学ぶ者すべてが心を一つにして

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

仏教音楽について

一堂に集まり、とくに人間の生き方に関するお話を聞く講座」。それがこの宗教講座だそうです。あるいは「この学園は真宗の教えを基にした教育を看板にした学園である」とあります。そういう学校に皆さん方がいらっしゃる。これは誇っていいことだと思います。

さて、はじめに、皆さん方にお尋ねします。人の前で一人で歌を歌える自信のある方はちょっと挙手してください。……。では、一人では自信がないけれども、友人や仲間とならば歌えるという方は手を挙げてください。……。ありがとうございました。ひょっとしたら、ほとんどの方が後者だと思います。人の前で歌うのは非常につらいとお思いの方が多いと思います。歌うということも自己表現の一つですが、人間は皆、表現する手段をもっています。書く、彫る、歌う、踊る。いろいろあります。そのなかで、とくに声を出して、あるいは楽器でということになりますと、音楽ということになります。

仏教音楽もまた、そういう人間の何かを表現する一つの手段という意味があると考えます。では仏教音楽とは、一体人間の何を表現するものとしてあり、それはいかなる歴史を持ったものなのでしょうか。そうしたことをお話しできればと思っています。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

一　生命（いのち）の実感―最近の世相から―

昨年の宗教講座の第四回目に、「思い込み、思いあがり」という題で大谷大学の名畑崇教授がこちらでお話をなさいました。その中で、歴史的な時間の流れについて、私たちは歴史をすべて知っているわけではないし、経験したわけでもありませんが、その記録を見たときに、もう少し驚き、びっくりしてもいいのではないかという問題提起をされています。

例えば、五十年前、第二次世界大戦がありました。日本人だけで、戦闘員、非戦闘員を含めて三百十万人ほどの戦死者がいらっしゃいます。世界では五千万人以上だそうです。そういう人たちの命のうえに現代のわれわれの社会が成り立っているということです。そういったことについてもう少し驚くべきではないか、びっくりすべきではないかということです。古来、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ということがあります。あるいは、「熱しやすく冷めやすい」という日本人の気質が若干あるようですが、われわれにはともすると、時間が経つと大変だった事実まで忘れてしまう傾向がありますね。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

現代日本は、まさしく飽食の時代です。しかし、ヨーロッパ、アフリカのほうでは飢餓状態で死んでいく子どもたちがかなりあります。同じ時代に生きながら、一方にそういう事実がある。そういったことを少し知ったときに驚くべきではないか、びっくりすべきではないか。それが現代を生きている命あるわれわれの責任ではないかということをおっしゃっていると思います。

去年の一月十七日に阪神大震災がありました。思いがけない多くのボランティア活動の動きも報道されました。参加なさった方もいらっしゃるでしょう。ところが、その一年前の一九九四年一月十七日という同じ日にロサンゼルスを中心にマグニチュード六・六という直下型の大地震がありました。一年前のことをわれわれは忘れて、去年の一月十七日に目がいきました。そして今年、一年以上経って、さあ、その思いがどうなっているでしょうか。少しずつ薄れてきているのではないでしょうか。そういうことをやはり考えていかなければならないのではないか。

それから、去年の五月にオウム真理教問題で逮捕者が出ました。十一カ月ほど経ってようやく裁判が始まっています。サリンに驚きましたし怒りました。しかし、今はどうでしょうか。

少し薄れていないでしょうか。オウム事件と教団の若い人達のことを考えると、われわれは何が真実なのかといったことにもう少し鋭く目を研ぐ必要があるのではないか、感性を研ぎ澄ましていくほうに一生懸命になってもいいのではないか、そういうふうに思います。

「本当のことがわからないと、本当でないものを本当とする」という言葉があります。似たようなことですが、日本の画家中川一政さんが「自分の眼を明るくするのが勉強だが、眼をふさがれたり曇らされたりする勉強をしていて、勉強をしていると思っている事はないだろうか」といっておられます。誤った勉強をしていて本当の勉強をしていると思っていることはないだろうかという問題提起です。もう一つ、オーケストラの指揮者のハンス・フォン・ビューローという人は「私は人生の四分の三を一人のペテン師のために浪費してしまったが、残りの人生は本当の人のために使いたい」といっています。私の申しあげたいことがおわかりだと思います。「本当のことを学ぶということが大切」なのですね。

ところで、今年は宮沢賢治さんの生誕百年にあたり、いろいろなイベントが開かれております。賢治の詩のなかに没後発見された「雨ニモマケズ」がありますね。その「雨ニモマケズ」の形式を模した替え詩があります。ある地方の中学二年生の子の詩です。ご紹介いたします。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

仏教音楽について

親の勉強しろの声　にも負けず
受験戦争　にも負けず
丈夫な体と　ベリーナイスな頭脳をもち
けっして　カンニングをせず
いつも　ひそかに　頭を鍛えて
一日に　ＤＨＡガムを三三枚と
梅干しを　二十個　食らい
あらゆることを　数字の式になおして
よく　ヒアリングと　スペリングをし
そして　忘れず
古い校舎のネズミと　一緒にいて
東に　超一流の家庭教師いれば
行って　勉強を教えてもらい

西に　世界的に有名な神社あれば
行って　合格祈願をして
南に　いい大学あれば
今から　金を渡しておき
北に　めっちゃ　頭がいい人がいれば
今から　蹴落としておき
落ちたときは　涙を流し
合格したときも　涙を流し
みんなに　機械呼ばわりされる
そういうものには
私は　絶対なりたくない

往々にして　親から「勉強しなさい」といわれた経験のある方もいらっしゃると思います。
そういうなかでこの中学二年生の子はこういう詩を替え歌として書きました。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

血液製剤によるＨＩＶの感染問題、それに対する国の対応の問題、いろいろなことが今の社会を賑わしています。賑わしているだけではなくて命がかかっております。そういうことをもう少し実際に自分の生きている社会の問題として、驚き、敏感になってもいいのではないでしょうか。

二　宗教の本質

さて、「宗教」という言葉について、少し触れておきたいとおもいます。これは、よく「Religion」の訳語と理解されていますが、厳密には、「Religion」と「宗教」とは、そう簡単には結び付かない言葉なのです。

宗教の「宗」は、本来は仏教用語なのです。サンスクリットでは「宗」のことを、「Siddh-'anta」と書きます。これは、二つの単語が合成されてできています。「Siddha」＝「成就されたもの」「完成されたもの」と「anta」＝「極致」という意味です。それから「教」は、偏部と作りとにそれぞれ意味があって、「倣う」＋「攴＝鞭撻を加え、励ますこと」＝「相手に応

じて様々な角度から具に説示され、述べられた言説を倣い学ぶこと」という意味になります。

次に、「Religion」の語義ですが、ラテン語の「religio」が元の言葉になります。紀元前のキケロは、「拾う、読む、集める、観察する」という意味の「relegere」という語を選びましたが、紀元後三〜四世紀のラクタンチュースという神学者は、「再び結ぶ＝religare」を選びました。神学者の理解はだいたい後者のほうが多いようです。いずれにしても、人類と神とを結ぶ、再び関係づけるということです。つまり、創世記の記録にありますように禁断の知恵の実を味わったアダムとイブが天国から追放されますが、それをもう一度結びつけようとするのが「Religion」の意味です。それが、「Revelation（啓示の宗教）」、啓示という神の示された絶対的なもの、それに従う宗教が「Religion」なのです。

ところが仏教は、「Buddha　仏陀」という言葉が表す通り、「目覚めた者、目覚めた人の教え」を意味し、つまり、自覚ということを重要視する教えなのです。啓示というふうに規制されたものではなくて、自覚の宗教が仏教です。ですから、厳密に申しあげますと仏教は宗教ではあっても「Religion」ではありません。それが明治以降、西洋文明が入ってくる段階で十分な検討をせずに「宗教＝Religion」と翻訳してしまいました。本来は別の意味であるというこ

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

とを、ご記憶ください。

仏教の立場から致しますと、いま申し上げたとおり、宗教というのは、本来、自覚が目的です。例えば、自分が生きているという事実、これは実は自分一人で生きているわけではありません。気がつかないうちにいろいろな方のご縁をいただいて、手助けをいただいて生きている。もっと厳密にいいますと、生かされているということです。生かされて生きているというのが正しい理解かもしれません。つまり、宗教ということは、生かされて生きている自分自身を確認することです。自分の体には五臓六腑、いろいろな臓器がありますが、それぞれの臓器が独立していては体は成り立ちません。一つの臓器の働きは他の臓器の働きをサポートしています。別な動きは別のほうの動きをサポートしています。ただ、それぞれが気がつかないだけです。そこに気がつき自覚する、それが仏陀という言葉です。

先ほど光華女子学園の教育の基本に精神文化をおいておられる、そのことは大事だと申しましたが、ここに結びつくからであります。自分の存在ということには、当然、同時に相手の存在があります。自分の誕生には、当然、両親の誕生ということ、つまり親としての誕生ということがあります。親というものは、子どもが誕生してくれてはじめて親という誕生があります。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

そういう関係が、命の流れのなかでお互いに味わいあえる。そういったときの人間の気持ちというのは非常にフレキシブルになります。頑固ではなく柔軟になります。柔軟になったところにはいさかいは数少なくなります。「俺が」というところには、必ずいさかいがあります。争いが起きます。「俺が」を越えたところに無我があり、そのところにはじめて安らぎの世界が生じてきます。それが宗教ということであります。

三　基本的仏教用語の確認

ここで、基本的な仏教用語の意味について、少し説明をしておきたいと思います。

まず、「縁起」。サンスクリットでは、「pratītya-samutpāda」、パーリ語では、「paṭicca-sa-muppāda」です。「prati-」は、「～に対して」という意味です。「i-」というのは語源です。これは「行く」という動詞の語根「√i」に「-tya」という分詞の語尾がつき、「すべての事象は、種々な要素が集まって生じているもの」という意味になります。

次に、「無常」。サンスクリットでは「anitya」、パーリ語では「anicca」です。すべての事

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

象は、「常なるもの（nitya）」ではなく、「変化するもの」という意味です。

次の「無明（無知）」はそれぞれ「avidyā」と「avijjā」です。「a-」は否定、「√vid」は知るという意味です。「-ya」は分詞です。つまり、知らないこと、無知なることです。「迷い、苦しみの根元・原因は、真実（真理）に暗いこと」。したがって、漢訳は、「無明」あるいは「無知」とされるのです。

最後に、「真実（真理、諦）」。「諦」という字は「あきらめ」と読みますが、この「あきらめ」は「give up」ではなくて、「あきらかに見極める」という意味です。サンスクリットには、「√as」という英語の be 動詞にあたる語があり、その現在分詞が「sat-」で、それに分詞の「ya」がつきまして「satya」となります。

「真実とは、真理と実際とを融和させるものである。理を尽くし、情を尽くせるものである。それはわれらの光となり、命となるものである」とおっしゃってくださった先生がいらっしゃいます。また、松田タミさんという北陸在住のお年寄りがいらっしゃいます。その方の言葉に「仏様の教えを聞くと、はじめて素直でない身勝手な自分が見えてくるのですね。人間というものは、教えられないと自分が悪かったということに目が覚めないものですね」という言葉が

あります。何でもない田舎のおばあさんの素朴な言葉です。しかし、これは「satya＝真実」に気がつかれた方の言葉だと私は思います。真実に出会った世界では、こういうことが感じられるようです。つまり、教法という鏡に照らされてはじめて自分がわかるのでしょう。

皆さん方もお化粧をするときに鏡をご覧になるでしょう。それはあくまでも自分がお化粧するためであるにしても、鏡を見て自分がわかりますね。それと同じく、教法というものに照らされて目覚めた人、それが仏陀であり、その点を発展させますと、仏陀の可能性を私たちももっていることになります。「生きとし生ける者すべて仏性あり」という言葉があります。みなそれぞれ可能性をもっているということ。学んでいけば、照らされて感じていくということ。こんな素晴らしい可能性を内在している私たちであるわけです。

オウム真理教の場合は、結局特別な世界でありました。しかし、信心とか信仰ということはけっして特別な世界ではありません。人間が人間らしくなっていくという非常に簡単なことですけれども、未熟な人間の力では容易でない真実の教えというものを、仏様の教えに照らされてよび覚まされていく。そのときにはじめて自分の身に気づかせられる。自分は何も知らなかったな、自分は誤解していたなということに気づかせられる、思い知らされる、つまり実感させ

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

られる世界です。実感するということは理屈ではありません。大事な世界です。それが信仰の世界だと思います。

四　仏教音楽

本題の「仏教音楽」についてのお話に入りたいと思います。

釈尊の教説は弟子たちにとって、非常に大切なものでありました。経説を学ぶ方法は、当時は文字がありませんから、記憶にたよるしかありません。暗記です。暗記というのは一夜漬けの暗記ではなくて、生涯かけての暗記です。そのためにいちばんいい方法は、その言葉にリズムをつけ、メロディーをつける。つまり、歌にすれば覚えやすいわけです。皆さんも、例えば歴史の年号を覚えるときに語呂合わせをなさったでしょう。あれに似たものです。ただ、歴史の年号は、試験がすむと忘れてしまいますが、仏弟子たちの記憶は、常に残っていきました。そして、その事実が経典の記述として伝えられています。

パーリ語原典のなかに「Di-gha-nikaya（長部経典）」という経典がありますが、そのなかに

次のような教典があります。パンチャシカという音楽の神様の子どもがおりまして、その子は歌もヴィーナという楽器も非常に巧みであった。彼が歌いながら弾き語りをしていた。それを聞かれた釈尊がおっしゃった言葉です。

パンチャシカよ。今、汝の弾いたベールヴァ製の黄色いヴィーナの絃の音色は、〔汝の〕歌の音色と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、汝のその絃の音色は〔汝の〕歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった。

歌声と音色が、とてもよく調和していたというのです。ハーモニーのすばらしい音色は、相手の心に響くということです。しかもパンチャシカの場合は悟りを求めた命がけでの演奏でしたから、その心の熱烈さが釈尊に伝わったのです。

さらに、教典では、パンチャシカの演奏が「如来を称賛し、また、人々を感動させた」と記し、「涅槃（仏教の悟りの世界）をも説いていた」と記述されています。音楽にはそういう力があるという記述ですね。ただ単なる物理的な音声ではなくて、命の躍動が音になったときに、

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

まさに悟りの世界、涅槃の世界を表現することになるのだということです。

釈尊の亡くなられた直後に、仏典の編纂会議がなされました。その編纂会議のことを「結集」といいますが、実はこの原語は、「Saṁgīti」といいます。「sam」とは「一緒に、共に」という意味で、「gīti」は「歌い演奏する」です。英語では「singing together」あるいは「consert」や「symphony」と訳されております。「symphony」は「sym（共に）＋phony（音）」です。これは競争ではなく、合わせるという意味です。それが結集という仏典の編纂会議の本当の意味です。

仏教とは、先ほど申しましたように、仏陀、自覚した人、真実を悟った人の教えです。音楽は、真実の響き、心にしみる響き、それを楽しむということです。この「楽」という字には「願う」という意味があります。本当の響きを願う世界、それが音楽です。

たとえば、かの有名なバッハは、「音楽は精神の中から日常の塵埃を掃除する」と言い、イギリスの詩人バイロンは「葦のそよぎにも音楽あり、小川のせせらぎにも音楽あり。人もし耳を持ちなば、ものみな音楽あり」と言い、ワーズワースは、「音楽は人類のもつ普遍的な言葉である」と言っております。また、金子大榮先生は、「お浄土は音楽の世界ですよ」と仰って

下さいました。それらを合わせますと、真実の生命のひびき、あるいは心の交流方法、そういったものを楽しみ願いあう世界、それが仏教音楽だと言えるのではないかと、私は感じております。つまり、目覚めた方の教えを表した真実の生命の響き、それを学び、楽しみ、願いあう、そういう心の交流の世界が仏教音楽だと思います。

Ⅱ　仏教音楽―その流れ

仏教音楽は、東南アジアを通って中央アジア、チベット、中国、日本と伝わってまいります。たまたま四月十三日付けの新聞に、東大寺の大仏開眼法要のときの出席者の名前を書き出した巻物が発見されたという記事が載っていました。全部で十五巻あったようです。今までは記録がなく、『続日本紀』などから大雑把なことしかわかりませんでした。開眼法要に出席した一万八百五十人のお坊さんの名前が書いてあるそうです。そのなかに菩提僊那（Bodhisena）というインドのバラモン僧が来て、その儀式を中心になって執行したとあるそうです。そういうインドの方々、あるいはベトナムのお坊さんたちが、日本へ来て、仏教文化を日本に伝えたの

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

です。

このように仏教文化とともに仏教音楽も日本へ伝えられました。では、こうして伝えられた仏教音楽は、近現代にはどのような歩みをみたのでしょうか。

近代になり、明治十二年（一八七九）、文部省に「音楽取調掛」が設立され、音楽教育の近代化が開始されました。明治時代は仏教音楽の創草期といわれ、後半になりますと、仏教唱歌や仏教童謡が、いろいろな作曲者の努力でつくられるようになります。

大正時代は、仏教音楽の成長期で、いろいろな分野の作曲者がいろいろな方法で各種の作品を発表しています。昭和になりますと、まさしく仏教音楽の時代ということが出来ます。昭和三年（一九二八）には、「仏教音楽協会」が文部省の中につくられ、当時の著名な作曲者あるいは文学者たちが理事として参加し、協力しあって現在の仏教音楽の基をつくってくださっております。

戦後になってきますと、東本願寺に「大谷楽苑」という団体ができまして、讃仰歌という形で三十五曲の創作作品が発表され、皆さんの『聖典』の中にもその作品が何曲か載せられています。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

ところで、仏教音楽というものは、やはり作品として形をなさなければなりません。つまり、問題は、作品が演奏という形で発表されなければならないのです。残念ながらこの演奏者の数はそう多くありません。

仏教音楽というものがせっかくありながら、思いを込めてつくられながら、演奏される機会が非常に少ないということ。ここからも現代の問題点が浮かび上がってきます。つまり、高度経済成長の結果、過度の消費社会を迎え、同時に、楽器産業が広がり、音楽の電気化がなされるようになり、最近では、カラオケが流行しております。音楽と一口に言いましても、興味関心が非常に多様化してきています。

このために、本来、合奏とか合唱という複数の人達の音楽が、個人の音楽へと形態が変化してきているように思えるのです。しかし、人間というのは一人では生きられません。大勢の人々が心を合わせてハーモニーをつくる、そういう喜びとか生命の実感がさらに必要ではないか。そういう思いへの回復といいましょうか、その方法として仏教音楽の果たす役割の重大さが、もっと積極的に考えられないものだろうか、と思っています。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

Ⅲ　仏教音楽―そのひびき

それでは、ここで実際に仏教音楽をテープ演奏でお聞きいただきたいと思います。子どもの歌と普通の讃歌、つまり大人の歌の二つに分けてみました。はじめに子どもの歌を二曲ほど聞いていただきます。最初は「ほとけさま」という曲です。

仏さま　　山田　静　作詩　　小松　耕輔　作曲

一、のんの　ののさま　ほとけさま
わたしのすきな　かあさまの
おむねのように　やんわりと
だかれてみたい　ほとけさま

二、のんの　ののさま　ほとけさま
　わたしのすきな　とうさまの
　おててのように　しっかりと
　すがってみたい　ほとけさま

三、のんの　ののさま　ほとけさま
　みあかしあげて　おがむとき
　おすがたみえて　きらきらと
　ごこうのひかる　ほとけさま

次は、「ほとけさまは」という家庭の中の状況を歌いあげた作品です。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

ほとけさまは

森山　美苗　作詩

弘田龍太郎　作曲（大谷楽苑選定）

一、ほとけさまは　どこにいらっしゃる
春は　花咲く　枝のもと　ララ
夏は　水辺の　草のかげ　ララ
秋は　空ゆく　雲の上　ララ
冬は　窓うつ　雪の中　ララララ
いつも　どこかで　見ていてくださる
いつも　何かを　おしえてくださる
ほとけさまは
あれあれ　あそこに　いらっしゃる

二、ほとけさまは どこに どこに いらっしゃる

お眉ま白な おじいさま ララ
お目々やさしい おばあさま ララ
お胸豊かな お父さま ララ
お手々清らな お母さま ララララ
昼でも 夜でも 守ってくださる
いつも あなたを 支えてくださる
ほとけさまは
あなたの おそばに いらっしゃる

先日、松任市のあるお寺の本堂で佛教讃歌を演奏する機会があり、これを演奏しました。本堂いっぱいの三百人ほどの方々が顔をほころばせてニコニコ笑いながら聞いてくださいました。作曲者の引田龍太郎さんは童謡や佛教音楽をたくさん書いていらっしゃいます。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

次に、一般の作品をご紹介しましょう。一曲目は、皆さんの『聖典』にも載っている「みほとけは」です。

みほとけは　　仲野　良一　作詞　　信時　潔　作曲（大谷楽苑選定）

一、みほとけは
まなこをとじて　み名よべば
さやかにいます　わがまえに
さやかにいます　わがまえに

二、みほとけは
ひとりなげきて　み名よべば
えみてぞいます　わがむねに
えみてぞいます　わがむねに

二、みほとけは

したいまつりて　み名よべば
つつみています　わがいのち
つつみています　わがいのち

二曲目は、「みめぐみの」という作品です。古関裕而さんの作です。この方は、「鐘の鳴る丘」とか、「君の名は」という終戦直後に有名になったラジオ・ドラマの主題歌などをお書きになっていらっしゃいます。

みめぐみの　　河合　恒人　作詞　　古関　裕而　作曲（大谷楽苑選定）

一、みめぐみの　ひかりにぬれて
蓮池に　花はま白く
みほとけの　生命かおりて　現し世に

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

美しき　美しき　花はひらきぬ

二、まろき虹　空にかかれる
七色の橋を　わたりて
みほとけの　み手にいだかれ　遥かなる
美しき　美しき　国をめぐらん

三、わがこころ　うれいなき華
永久の母を　したいて
みほとけの　み名となえつつ　諸共に
美しき　美しき　道をあゆまん

三曲目は、「いのち」という佛教の生命観が巧みに歌いあげられた作品です。

いのち

薮田　義雄　作詞

下総　皖一　作曲

一、野の花の　小さないのちにも
仏はやどる　仏はやどる
朝影（あさかげ）と　ともに来て
つつましい　営みを与える
おなじように

二、野の鳥の　幼（おさな）いいのちにも
仏はやどる　仏はやどる
涼風（すずかぜ）と　ともに来て
生きる日の　喜びをささやく
おなじように

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

三、白露（しらつゆ）の　はかない命にも
　仏はやどる　仏はやどる
　月魂（つきしろ）と　ともに来て
　　一夜さの　やすらぎを教える
　　おなじように

時間の関係で、レジュメに書きました他の作品は、省略させていただきます。

Ⅳ　むすび―仏教音楽　その目的

最後に、佛教音楽の目的について、お話したいと思います。その目的は、真実の生命いのちのひびきに出遇うということです。

レジュメに紹介した何人かの言葉の中から詩を一つ紹介したいと思います。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

自分の番　―いのちのバトン―

相田みつお

父と母で二人
父と母の両親で四人
そのまた両親で八人
こうして数えていくと
十代前で千二十四人
二十代前では……？
なんと百万人を越すのです
過去無量の
命のバトンを受けついで
自分の番をいきている
それがあなたのいのちです
それが私のいのちです

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

見事に生命のバトン、願いのバトンを、そして教法の流れ、教えの流れ、それを歌いこんだ詩だと思います。

そして、実際に自分の番をつとめておられるのが今この場におられる皆さん個々です。この責任は個々が負わなくてはなりません。と同時に、この責任は将来の皆さんのそれぞれのお子さんたちに伝えなければなりません。そして、実はその流れは、悠久な歴史の流れに連なっているものであるということ、それにちょっと気づいてみましょう。それに気づいたときに、今日のこの場も一つの大きな出会いであることがお分かりでしょう。いわば一瞬一瞬なんですが、その一瞬をどう生かしていくか、どう生きていくか、どうそれを自分で受け止めていくか、それ次第で、この一瞬の連続というものが普通の時間で終わってしまうか、充実したものになるか。それは、あなたたち自身がお決めになることです。自分たちの責任です。生命のバトンをもらいました。持って今走っています。このバトンを次の子どもたちに渡さなければなりません。長いのですが、地球の歴史からいえばほんの一瞬です。この長くて短い一瞬をどう生きるか、それがいわば一つの課題です。

次に紹介する百一歳になる日本画家、小倉遊亀さんの言葉がお手本になるように思います。「何ももたぬという人でも、天地の恵みはいただいている」。つまり、私は何もないよといっている人でも、天地の恵みはいただいている。素晴らしいですね。形のあるものではなく、自然のなかでの天地の命、恵みをいただいている。そして、「百歳になったからといって何も特別なことはございません。百歳も十歳も、生かされているということは同じです。命のなかにおいてはまったく同等です」。

それから、歌川豊國さんという浮世絵師の言葉。皆さんも新聞やテレビでご覧になった方もあるでしょう。九三歳の歌川派の方です。四月八日、大阪府立桃谷高校の定時制夜間部に入学されました。そして「努力してこそ力が発揮される。これからも学業に励みたい」とおっしゃった。その次には「将来は大学に進学して、美術関係の論文で博士号を取得したい」ともおっしゃっています。九三歳ですよ。素晴らしいですね。

もう一つ最後に、「いのちのひびきを知りとることの大切さ」ということから、友人（松任市本皆寺住職　松本梶丸氏）に教えられた一人の方をご紹介いたします。画家であり、書家だった方のことです。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

仏教音楽について

ふとしたご縁で中村忠二という画家（書家）を知りました。中村忠二といってもほとんど知る人はありませんが、この人は亡くなってから作品が注目され、今は美術館もできるほどになりました。生前はほとんど知られることがなく、貧しいなかで生涯を終えました。

画家でありますからアトリエを持っていましたが、十年ぐらい前、一カ月をだいたい三千円で暮らしたそうです。なぜそんな生活ができたかといいますと、一週間に一度、朝四時に起きてリヤカーを引き、町を一周するんだそうです。すると、人間の日常に必要なものはどこにでも落ちていたそうです。靴、シャツ、ズボンなど衣類を含めて日常品も食べ物も。今は使い捨ての贅沢な時代ですから、そういったものがいっぱい街に捨てられてあるそうです。それをリヤカーに積んで持ち帰って、日常生活に間に合わせていた。ですから、生活費が月三千円でよかったそうです。

そんななかで悠々と絵を描いていました。しかもその絵は風景とか人物画ではなく、何を描いていたかというと、対象は昆虫だったのです。しかも、自分のバラックのようなアトリエに集まるゴキブリ、ハエ、カ、セミ、カマキリ、ガ、そういったものでした。普通

でいうと絵の題材にならないようなものばかりです。しかし、それを描いて、その虫を讃嘆しながら一生を終わった人です。

そのアトリエに入った方の感想ですが、「宇宙へ連れられていったような広さと暖かさを感じた」といいます。汚いアトリエなのですが、広さと暖かさを感じた。虫から回向される、教えられるというとおかしいですが、虫の命のなかにも、人間の命と同じ命を感じ取っていったのでしょう。

先ほどの「いのち」という歌がそうです。人間以外のすべての生きとし生けるものにも生命を感じ得る世界、しかも人間と、自分と同じ生命を感じていた。虫の生命も人間の生命も「生きていくという重さ」において変わりはない。そういうものを虫のなかに感じていたのでしょう。

そして、ほとんどの絵には、その絵を描いた上に虫を讃える「賛」という詩が書いてあります。そういう虫たちに、如来から教えられたという何か暖かく呼びかけてくるものを感じたに違いありません。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

私がいただいた絵はどんな絵かといいますと、セミの死骸が描いてあります。セミの死骸なんていうものは絵になりませんね。夏の終わりですと、どこでもセミの死骸は見ます。しかし、この中村さんは、そのセミの死骸から如来の回向を感じ取ったということです。セミの死骸を描いて、そのセミを讃える詩を添えました。その詩は「セミさんよ」という言葉で始まります。「セミさんよ」というこの呼びかけですと、まったくセミと人間は同格ですね。同じ命を感じているからそう呼びかけるのです。

「セミさんよ。道で君を拾ったがい」と、「君」という呼びかけに対等な命の関係を感じます。素朴ですけれど非常に柔らかく暖かい感じがします。「セミさんよ。道で君を拾ったがい、歌って歌って力尽きてね、木から落ちたんやなあ」とセミの死骸に呼びかけています。セミの生涯というのはひと夏です。わずかです。精一杯歌い尽くしていくだけのセミの生涯です。そして力尽きて木から落ちて死んでいく。

この詩のお終いで中村さんは次のように結んでいます。「ぼく恥ずかしいよ」と。

これもすごいですね。セミの一生に比べて、人間の一生、自分の一生はどうだったのかということを考えている。不平やら不満やら愚痴が絶えない。それが自分の一生であると。セミはただその短い生涯を一生懸命歌い尽くして力尽きて死んでいった。動物はみなそうですね。人間だけです。あれが欲しい、これが欲しい、あれも欲しい、これも欲しいという欲望が次から次へ出て来ます。そういう思いのなかで中村さんはセミの死骸に対して、セミの精一杯生きた生き方に対して、「ぼく恥ずかしいよ」と世間に向かって懺悔し、実感しておられるのです。生命の実感です。

そういう方が画家としておられました。山形のほうらしいですが、死後、美術館ができているそうです。いつか私もご縁があったらお訪ねしたいと思っています。

与えられた時間が少なくなってまいりました。

こちらのある理事の方が「光華女子学園は、家庭における母親の子どものしつけ、教育、そういったものを育てるという大切な仕事があるのだ」とおっしゃっておられます。「安心」という字がありますね。「安」のウ冠の下は「女」という字です。「男」ではありません。これは、安らぐということです。母親の愛情というものは、往々にして仏様の慈悲にたとえられます。

『真實心』第十八集平成8年度1997年3月発行（京都光華女子大学）

普通の母親ですと自分の子どもだけになってしまいますが、それが仏の世界ではもっと広がって、血縁だけではなく、法縁のなかではすべてが自分の子どもである、それが仏様の世界です。先に触れましたが、それを知った田舎のおばあさんが、自分が知らなかったことに初めて気づかされた。「ありがたいですね」と実感できる世界。そういったものがとくに仏教音楽の場合は、さらに音を通して、ひびきとして実感され得るもののようであります。

これからの社会はまさしく厳しくなる一方です。そういうなかで、皆さんがそれぞれの心の田圃を耕してください。カルティベイト（cultivate）してください。そして、充実した人生を、そして将来をお迎えくださいますように願いながら、私の拙い話を終わりたいと思います。長時間ご静聴ありがとうございました。

――一九九六・五・二三――